

知の不安定性の力：

藤原清輔と藤原俊成の歌論の分析からみた中世における『万葉集』の受容について

チトコ マウゴジャタ カロリナ
CITKO Malgorzata Karolina

はじめに

『万葉集』は、日本文学の歴史の中で何度も創造、そして再創造されてきた。『万葉集』の受容は、『万葉集』の（政治的・歴史的・哲学的・思想的な）目的を日本社会に位置づける上で重要な役割を果たした。『万葉集』は、日本の文化や文学の歴史の源であるため、和歌の研究の分野では非常に重要である。そのため、『万葉集』は常に世界の日本文学者の多くの関心を引き、論争を引き起こしてきた¹。しかし、何世紀もの研究にもかかわらず、私たちは現在『万葉集』を「知っている」とはたして言えるのだろうか？ 各時代において、歌人と学者たちが『万葉集』をどのように理解し、受け取っていたのか、その受容についてわれわれはいま知ることができる。

現在の『万葉集』の定義は以下の通りである：

「現存最古の歌集。『万葉集』二十巻が現在みる形にまとめられたのはいつか不明。年代の明らかなもっとも新しい歌は七五九年（天平宝字三）正月の犬伴家持の作であるから、最終的な編纂はそれ以後となる。」〈日本大百科全書（ニッポニカ）〉。そして、現在『万葉集』は勅撰和歌集ではなく、私家集として定義される。そのような『万葉集』の定義は、中世前期において我々が考えるよりも流動的で、不安定であった『万葉集』の受容を明らかにしてはくれない²。

なぜ『万葉集』なのか？

『万葉集』についての研究は早期に始まった。七八四年に都が奈良から長岡に移ったため、奈良で用いられた西部方言が使われなくなり、中古日本語が使われるようになった。この言語の変化によって、平安時代には、すでに歌人は万葉仮名で書かれた『万葉集』を読めなくなり、上代日本語で詠まれた和歌を完全に理解することができなくなった。このような『万葉集』の和歌の「わかりにくさ」のために、古点・自点・新点という注釈が行われた。さまざまな注釈や、奈良から長岡、そして平安への遷都による言語、文化の変化により、『万葉集』についての知識ははるかに増え、流動的になり、不安定になった。平安時代の歌人は注釈無しでは万葉仮名を読めなくなっただけではなく、『万葉集』についての多くの知識は和歌の言説から削除された。『万葉集』の原本はもう存在せず、『万葉集』そのものは複数の写本の形で残った。しかも、残存する様々な写本には、『万葉集』本文の相違が含まれている。和歌の伝授における口伝も『万葉集』についての知の流動性に貢献し、中世前期の幾人かの歌人は、その知の解釈を定める権威として存在していた。

『万葉集』に関する知識は特に中世に争われた。当時、数多くの和歌の家が登場し、さらに和歌が都の政治と絡み合うようになったためである。平安時代の『万葉集』についての一般的な知識はすでに断片的であったため、藤原清輔・顕昭・藤原俊成のような歌人たちは失われた言説の一部を取り戻そうとし、様々な『万葉集』本文やその歴史に関する問題について推測した。実際、歌人たちは『万葉集』と他の歌集に関する知識の不安定性を利用することで、力（権威・権力）を得た。彼らの歌人・判者・学者としての活動をみると、自分の知識とその伝達の様式を和歌界で最も正当なものとして成立させたいという衝動が見える。そのためおそらく、藤原清輔・顕昭・藤原俊成のような歌人は多くの歌論書を生み出し、それまでは書面で記録されていなかった口頭で伝達した部分を書き残した³。平安時代の歌人たちは、写本を所持していること自体がもたらす権力を認識していた。知識を文献化し、口伝えを（歌論の形で）書かれた

ものに変容することによって、歌人達は自分の知識とその伝達様式の正統性を主張していた。写本の写しと歌論を著す活動は、文学生産の中心に自らを位置づけ、和歌界のリーダーであることを確立する機会を与えた⁴。

これまで『万葉集』の伝授・研究は六条家が独占していたと考えられてきた。その一方で、御子左家の歌人たちが、『源氏物語』などの平安時代の物語の専門家だったとみなされてきた。しかし、本研究の結論として、現在考えられているよりも、御子左家は、『万葉集』の学識に注目していたことが挙げられる。

なぜ藤原清輔と藤原俊成なのか？

本研究に藤原清輔と藤原俊成を選択した動機は、二人の歌人が中世前期の和歌界で高い地位をもち、その名声が広く認知されていたためである。六条家・御子左家の指導者として、和歌と和歌史について同時代の誰も匹敵しなかった知識を彼らは持っていた。藤原清輔と藤原俊成は古典文学の様々な写本を所蔵しこれらを研究し、歌人だけではなく和歌の学者でもあった。中世に写本を手に入れることは、簡単ではなかったが、清輔と俊成は自分の時代にはまれであった『万葉集』研究と写本へ直接接することができた。そのような貴重な写本を所持することは、和歌の家の長く続く伝統そのものを意味し、さらに他の歌人がふれることのできない知識を保持していることも意味した。清輔と俊成以外の歌人は、六条家・御子左家の歌人の教えのもとで、または私家集・歌論書のような二次的な情報源を通して和歌を学んだ⁵。

『万葉集』は和歌史の始原にあるので、どちらの和歌の家も『万葉集』を無視することはできなかった。『万葉集』を扱うということは常に挑戦がともなうことであり、徹底的な研究が必要である歌集と考えられていた。そのため、『万葉集』は清輔と俊成のようにその時代の最も知識がある歌人・学者の領分だった。『万葉集』の和歌を証歌として、あるいは本歌取に使うこと、または『万葉集』の編纂についての事柄を議論できること自体が、和歌界の指導者としての信頼性を確立させた。だからこそ、六条家も御子左家も『万葉集』を徹底的に研究

した。さらに、九条良経のために俊成が初めて著わした『万葉集時代考』(一九五五年)に『万葉集』についての知識をめぐる強調がなされたのである⁶。

藤原清輔と藤原俊成は、和歌界における二人の活動を相互に意識していた。二人の歌人は和歌を交換したが、貴重な写本を共有したことはなかったと思われる。彼らの専門知識は、同じ和歌の研究に由来していたが、おそらく同じ写本を研究することはなかっただろう。だからこそ、六条家と御子左家は和歌について高度な知識を持ち、他の歌人や和歌界と共有こそしたが、彼らの『万葉集』についての知識と和歌の解釈に相違が見られるのはそのためである。

歌論の重要性

歌論は中世において文学研究の主要な表現形式だった。様々な歌人と和歌の家は、自分の知識の一部を歌論書の形で子孫に伝えた⁷。歌論書のおかげで、わたしたちは和歌の創作の原則だけでなく、和歌界が和歌の価値を判断する枠組みも理解することもできる。歌人と和歌の研究者は、常に歴史及び過去の研究との関係によって自分自身の立場を定義していたため、新しい歌論書は、先行する歌論書と口伝に反応する形で作られていたということもわかる。また、歌論書は和歌と歌論における連続性さらに不連続性をも示しているため、和歌の言説における変化についても教えてくれる。

藤原清輔と藤原俊成の歌論書における『万葉集』の知識についてわたしたちが知ることができるのは、和歌界へ新たな情報や改められた知識だけではない。彼らの歌論は、先行する意見・知に挑戦することによって、彼らがそれぞれ『万葉集』の言説の一部にどのように主張したかを示してくれる。頻繁に弟子や支援者のため書かれた清輔と俊成の歌論は、二人の専門知識を知らしめる広告だった。和歌界の指導者たちは、弟子を引き付けるため、そしてその弟子に秘密の知識を伝えるために、歌論書を作成した。つまり、清輔と俊成は、特定の読み手のために歌論書を書いたのであり、ただやみくもに歌論をだしたのではない。

中世前期の歌人たちは、自分の能力を示す展示品として歌論書を流通させ、

他の歌人と共有した。このことは、様々な和歌の家の歌人の歌論書において、歌論同士の関係性をみることによって、これらの間につながりが見られることからうかがえる。例えば、俊成は自分の歌論書の中で、清輔と顕昭の歌論に言及した。

藤原清輔と藤原俊成は、自身の和歌の活動に権威を与えた貴重な写本を保持してだけでなく、かれらの祖先から伝わった知識もあったため、歌論を書く権利があり、また実際に書いたのである。しかし、彼らは歌論というジャンル自体を発明したわけではない。先行する時代の歌人、紀貫之、藤原公任、源俊頼なども歌論書を書いたが、通常は、自分の教えをその時代の主流として一生に一つの歌論書を著わした。歌論を著わすことが潜在的にもたらす意義を、初めて認識し、そして多くの歌論書を弟子のために書いた歌人は藤原清輔だった。清輔の存在によってはじめてわたしたちは、歌論の勃興・発展という現象を論じることができる。そのような（一人の歌人が多くの歌論書を書くという）傾向は、さらに多くの重要な歌論書も書いた俊成によっても行われ、続けられた。実際には、ロバート・ヒューイ（Robert Huey）が主張したように、中世とは、まさに和歌作成の専門化とその政治化の時代ただただけではなく、歌論作成と知識伝達の専門化や政治化の始まりであったとも言えるのである⁸。

テキスト流動性・不安定性

現在『万葉集』と呼ばれている歌集は、平安後期と鎌倉時代においては、じつは流動的なテキストで、写筆をする者たちによって和歌が置き換えられ、追加され、変更されたテキストだった。『万葉集』の写本の流動性という概念は、能楽にも認められている。『草紙洗小町』という能楽には、平安前期の女性歌人、小野小町が歌合に参加する。小野小町の対抗者である大友黒主という歌人が小町の和歌を密かに聞き、それに感服したため、小町の和歌を『万葉集』の写本に写そうとする。それによって大友黒主は、本当は小町の詠んだ和歌が、実は『万葉集』からの古歌であると指摘することで小野小町に恥をかかせよう

とするが、小町は次のように答える：

それ万葉は奈良の御宇。撰者は橘の諸兄。歌の数は七千首に及んで。皆わらはが知らぬ歌はさむらはず。万葉といふ草子に数多の本の候ふかおぼづかなうこそ候へ。⁹

小町は黒主の陰謀を見破り、それを天皇に示し、逆に黒主に恥をかかせる。しかし、ここでわれわれにとって最も重要なことは、黒主の『万葉集』の写本に対するカジュアルな扱い方である。平安時代の歌人は、作者という概念と、テキストの安定性（そしてその権威）の概念を現在と同じように見ていなかったということがうかがえる。古代の写本に和歌を写したり・追加することが、能楽の中でそれほど異常なことのよう描かれていなかったのであれば、中世の歌人も同じことをしていたということが想像できるのではないだろうか。能楽にでてくる『万葉集』の和歌の数も我々の知っているものとまったく違う：『草紙洗小町』の七千首は、現在に存在する『万葉集』のどの写本とも類似していない。能楽の『万葉集』の和歌の数はもちろん信頼しにくいのだが、『西本願寺本万葉集』に収録されている四千五百十六首という数との巨大な格差には、中世のテキストの流動性が、いかに大規模であったのかを潜在的に示してはいないだろうか。

中世文学の流動性は、日本に限られない概念である。キース・バスビー（Keith Busby）によって強調されたように、テキストの分散は古フランス語の中世文学における主要な特徴である。中世の筆耕者は、写本を写しただけではなく、その写本の背景にあった権威も再生産した。バスビーは、こうしたさまざまな筆記による介入を「意図された聴衆の好みと期待に合わせて、テキストを調整すること」として説明している¹⁰。そのような説明には、ある程度のテキストの形態の変化とそれらの伝達・受容が示唆されている。中世の歌人・学者・筆耕者は（『草紙洗小町』に提示されているように）、写本を修正・変化していた

だけでなく、それによって中世の読者の反応までも（たとえば現代の編集者が様々なテキストをある文脈で提示するように）操作したのである。

中世の『万葉集』の研究が示しているのは、その時代の歌人たちが『万葉集』についての失われた言説の一部を再構成しなければならないという意識もっていたことである。実際に、彼らは『万葉集』ならびに他の歌集に関する知の流動性を明確に意識し、自分の知の継承を安定化させる様々な制度を作ることで、知の流動性を自分の利益のために活用した。いわばテキストと知の不安定性が彼らに「力」を与えた。

『万葉集』と他の古典文学におけるテキストの流動性は、西洋の学界ではまだまだ過小評価されている。たとえば、信頼性が高い『西本願寺本万葉集』に基づいた『日本古典文学大系』が最も頻繁に使用されている。古代・中世文学の現代注釈版の存在と、それに対する学者の依存は、それらの注釈版の基になっている写本との距離・ギャップをうみだす。ヨーロッパの中世文学の学者であるジョン・ダゲナイス（John Dagenais）が主張したように、中世時代は写本が中心となる文化であるからこそ、現代注釈版に頼りすぎることは、けっきょく古典文学を全く読んでいないということになりかねない¹¹。

現在、西洋の学者の研究において、『西本願寺本万葉集』がもっとも正当な写本であるとされているが、それは二十世紀の単純化された誤った認識である。実際、他にも多くの断片的、あるいは全体的な形をもった『万葉集』の写本が存在している。全ての写本には伝達の歴史があり、『万葉集』の原本はとうの昔から存在していないため、どの写本が一番「正しい」と言うことはもはやできない。それぞれの写本は、作成された時代の兆候を示しているので、同じ歌集でも複数の写本をみていくことが重要である。

用例：藤原清輔の『袋草紙』（一一五七年）

一、故き撰集の子細

万葉集 和歌 四千三百十三首、この中、長歌二百五十九首。ただし本、

同じからず、定数を用る難し。

この集世もつて大同の撰と謂ふ。これ奈良の号に付くるの故か。極めたる僻事か。およそ聖武ならびに桓武、大同の朝をもつて平城帝と号す。国史に見ゆ。ただし大同に至りては山陵に付きてこれを号す。古今の序の如きは、「時は十代を歴、数は百年を過ぎたり」と云々。然れば桓武の御時に相当す。ただし疑ひ多し。一にはかの集は宝字三年以後の年号は載せず。一は家持の天平勝宝以後の官見えず。載する所の官はただ内舎人、^{うどねり}越中守、兵部少輔、少納言、左中弁等なり。就中、公卿の時の歌はこれ載せず。一は古今集に云はく、「貞観の御時万葉集は何比に撰ぜられたるぞ」と問はるるの時、文屋有季詠じて云はく、「ならのみやこのふることぞこれ」と云々。また野宮歌合の時、源順称して云はく、「むかしならのみやこふる歌よみしときなり」と云々。而れども桓武はこの京に遷都の帝なり。平安宮において集を撰ずるには専ら「奈良の都の古事」とぞ称すべからず。また桓武は延暦三年^{きのえね}甲子十一月十一日^{つちのえさる}戊申長岡宮に移幸したまふの由国史に見えたり。その以前の代の始めの纒か一兩年の間、和歌を撰ずる事を先となさざるか。^{なかんづく}就中、かの帝歌を作るの由所見なし。方々^{きたい}疑殆有り。¹²

以上は、平安後期の歌人が『万葉集』をどのように認識していたかを理解するために重要である。第一に、『万葉集』の歌数の四千三百十三首は、『西本願寺本万葉集』の四千五百十六首とは異なる。第二に、『袋草紙』には『万葉集』の多数の写本の存在が認められているため、清輔はテキストの流動性を意識していただろう。清輔の『万葉集』の歌数は（四千三百十三首）おそらく清輔が所有していた写本か、または最も信頼していた写本に基づいていただろう。実際、清輔は自分の『万葉集』を宣伝し、和歌界の基準にしようとしていた。清輔自身は『万葉集』の専門家として現れている。そして、清輔の『万葉集』が実際に四千三百十三首の写本だったとすれば、『万葉集』そのものは次の時代に歌

の除外・追加がされ、そして置き換えられたということがわかる。

予これを案ずるに、この集聖武の撰か。¹³

また「千歌廿卷」と称すといへども、実は千九十首なり。かくの如きは文花に付き、必ずしも定数を称さざるか。もしくは「十代」は字の誤りか。

撰者あるいは橘大臣と称し、あるいは家持と称す。^{くだん}件の大^く大臣は宝字元年薨卒すと云々。かの集桓武の撰ならば相違せり。家持は延暦四年謀反、薨去すと云々。その以前の遷都造宮の間に撰歌の条、疑ひ有り。いよいよ聖武の撰と謂ふべし。¹⁴

以上は、藤原清輔が利用した文学・歴史的資料からの情報に基づいた、『万葉集』の編纂について解説している。基本的に、『万葉集』が勅撰和歌集であり聖武の命により孝謙天皇の在位の時に編纂された、と書かれている。勅撰集として位置づけられる『万葉集』という中世前期のイメージのおかげで、六条家の『万葉集』への興味・研究・強調がある程度では正当化される。『万葉集』の勅撰集としてのステータスに初めて疑問を投げかけた歌人は、俊成の息子であった藤原定家だった。

『袋草紙』は、『万葉集』の撰者を決定しようとしている。橘諸兄と大伴家持は二人とも選者として言及される。清輔は、大伴家持のほうがいいとは書かないが、基本的に橘諸兄を撰者として排除する。そして、なにより、テキストの流動性が『万葉集』だけには限らないということも確認できる。清輔の『古今集』の歌数は（千九十首）、現在に認められている千百十一首とはかなり違う。したがって、『古今集』も歌数が違ったりする多数の写本の形で存在していただろう。そのような『古今集』の歌数についての合意の欠如は、中世における写本の複数性の証拠でもある。様々な歌集の写本は、重大な改訂や変更のプロセ

スを受けたため、中世前期は、現在とは違う形で、享受された。

用例：藤原清輔『奥義抄』（一一二四年～一一四四年）

『万葉集』の歌は、藤原清輔の『奥義抄』一卷の「盗古歌証歌」の項目にある。『古今和歌集』・『後撰和歌集』・『拾遺和歌集』・『金葉和歌集』・『古今和歌六帖』の歌とともに、『万葉集』の歌としての五首も含まれる。しかし、その五首の歌は『西本願寺本万葉集』と他の『万葉集』の写本には見つからない¹⁵。そのため、清輔が『奥義抄』を書いていたとき使用した『万葉集』の写本は、現在存在する写本に比べて、異なる歌が含まれていたのだろう。同時に、その五首の歌は『古今和歌六帖』に含まれているので、清輔が『万葉集』の写本の代わりに、二次的な情報源をも使用していたという可能性がある。要するに、現在『万葉集』とよばれるテキストと中世前期における『万葉集』のテキストは異なるといえるだろう。

用例：藤原俊成の『万葉集時代考』（一一九五年）

顕昭法師はこの世は十つきになんなりにけると申。古今の序をつよくまもりて、大同のみかとの御撰と申。

さなき人は、おほくさきのならの御よにえられたりと申は、たゞ世十つきのことは許こそ大同にあたりたれ。

あらはに聖武天皇くらゐをおりさせ給て、孝謙天皇くらゐにおはしますころの集とは見えて候へとも、たれうけたまはりて、一定えりたりとも、いつれのみかとのおほせ事にてありとも、たしかにかきたる物はなにも見え候はす。

諸兄大臣は天平勝寶八年 聖武天皇のうせさせたまふとし致仕^{チシ}。つきの年うせて候へは、人のほと、まことにうけたまはりてえらんも、あたりたる人に候へとも、ものなとにうろわしくかきたる事は見をよひ候はす。人

のつかさ世のありさまにて、あらはに聖武御時のことゝは見え候へとも、
さまへろんしいさかひ申あひて候。¹⁶

藤原俊成は、『万葉集』は聖武天皇の在位後に（橘諸兄が孝謙天皇の在位の時に）編纂された、と述べている。藤原清輔の『袋草紙』には、『万葉集』が聖武天皇の勅命によって編纂されたと書かかれている。しかし、俊成の『万葉集時代考』は、顕昭の『万葉集時代難事』（一一六八年～一一九八年）への批判応答として書かれた可能性が高い。『万葉集時代難事』によると、『万葉集』は、平城天皇の在位の大同期（八〇六～八一〇年）に編纂された。このように、顕昭の意見は他の中世歌人の『万葉集』の編纂についての意見と、清輔を含めて、大きく異なる。『万葉集時代考』は、顕昭の意見を厳しく批判しないが、俊成は顕昭の論理を弱体化させる。

藤原清輔は『万葉集』は、聖武天皇の勅命によったが、しかしおそらく聖武の退位後に、つまり孝謙天皇の在位のときに編纂された、と主張した。一方で、藤原俊成は、『万葉集』の編纂はおそらく聖武天皇の在位のときに勅命され、孝謙天皇の在位のときに完成された、と述べた。しかし、どちらの論者も、はっきりと、どの天皇の勅命によって編纂されたか確信をもっていなかったと思われる。この点で、二人の歌人の意見は事実上同じである。つまり『万葉集』が聖武の勅命により編纂された、ということに二人とも自信がなかったらしいのである。清輔も俊成も、その問題は検討すべきだと述べた。しかし『万葉集』の編纂者に関しては、彼らの意見に相違が見える。清輔は橘諸兄と大伴家持のどちらが編纂者だったかは、決定できなかったようだが、俊成は橘諸兄が編纂者である可能性の方が高いと主張した。

用例：藤原俊成の『古来風体抄』（一一九七年）

奈良の都聖武天皇の御時、タチバナノモロエ橘諸兄の大臣と申人、チョク勅をうけたまは承りて、万葉集をば撰ぜられける。¹⁷

『万葉集』が聖武天皇の在位のとときに編纂された、と藤原俊成の『古来風体抄』には書かれている。『万葉集』が孝謙天皇の在位のとときに編纂されたと藤原俊成の『万葉集時代考』に書かれたため、俊成は考えを変えたか、『万葉集』の編纂についての新たな情報資料を見つけたかであろう。

清輔朝臣と申し者の、奥義とかいひて髓脳とて書いて侍なるものには、ひとへに長きを「短歌」と定め書いて侍とかや。大方は、かやうの事万葉集をぞ証拠とはすべきところに、万葉にはすべて三一字の歌をば「短歌」「反歌」など書いていかにも「長歌」とは書かず侍なり。¹⁸

しかれども万葉集の事を言ひながら、ひとへに三一字の反歌・短歌を「長歌」と言ふらん髓脳は、万葉集を詳しく見ざるに似たり。¹⁹

以上は、藤原俊成が顕昭の『万葉集』の表現についての専門知識の不足を批判したところである。顕昭が『万葉集』を詳しく読んでいないと非難し、そして清輔の『奥義抄』を単に追いかけている、と俊成は指摘した。さらに、俊成は短歌と長歌について代替の解釈を提供する。直接に『万葉集』を見るべきだとも、清輔がよく『万葉集』を読んではいないとも、俊成は強調する。

中世前期における長歌・短歌の定義とは関係なく、俊成は長歌・短歌の再定義を試みる。俊成自身の専門知識は『万葉集』の写本の研究に基づくと暗示されるので、俊成が『万葉集』の専門家として現れる。そのような『万葉集』についての様々な問題の解釈流動性は、中世に多様の『万葉集』の写本が存在した結果である。しかし、俊成は、自分の『万葉集』の写本の重要性を権威として強調し、同時に『万葉集』に関する中世の言説の一部を再考している。

『古来風体抄』には、『万葉集』から約二百首の歌が入っている。そして、その二百首の歌は『西本願寺本万葉集』で現れる巻の順番と歌の順番と全く同じである²⁰。このことから、俊成は二十巻の『万葉集』すべてを入手することが

できたことがわかる²¹。

終わりに

中世における『万葉集』と和歌についての知識は、現在考えられるよりも流動的であった。そのような知の流動性は、六条家・御子左家を超えて既に確立された和歌の言説が存在していたために、可能だった。

歌人たちは、自分の知の継承を安定化させる様々な制度を作ることで、知の流動性を自分の利益のために活用した。いわばテキストと知の不安定性が彼らに「力」を与えたのである。

中世に『万葉集』は相違が含まれた複数の写本の形で残った。どの写本が一番「正しい」ということが確定できなくなったため、『万葉集』は（権威や力を求める）歌人たちの争奪の対象になった。

六条家と御子左家の対立を否定はできないが、和歌についての知をめぐる対立というよりも、政治・権力・権威の問題、そして自分の写本を最も正当なものとして宣言することをめぐる対立だった。その対立は、和歌界や弟子に『万葉集』に関する知識をいかに効果的に提示するかということに関する問題でもあった。御子左家と六条家の対立という概念・イメージは、俊成によって設けられ、自分をより進歩的な歌人・学者として位置づけるための、競争と反発の枠組みとして作用したのである。

【注】

- 1 例えば、折口信夫、佐佐木信綱、中西進（日本）、Ian Hideo Levy・Alexander Vovin（米国）、René Sieffert（フランス）、Frederick Victor Dickins（イギリス）、Karl Florenz（ドイツ）、Anna Gluskina（ロシア）、Wiesław Kotański（ポーランド）。
- 2 中世と平安後期・鎌倉前期の違いについては、Robert N. Huey, “The Medievalization of Poetic Practice,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 50, no.2 (1990): 651-668.
- 3 Steven D. Carter, “Seeking What the Master Sought: Masters, Disciples, and Poetic Enlightenment in Medieval Japan,” in *The Distant Isle*, ed. Thomas Hare, Robert Borgen, and Sharalyn Orbaugh (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1996), 35-58.
- 4 Michel Foucault, “Two Lectures,” in *Power/knowledge: Selected Interviews and Other Writings*,

- 1972-1977, ed. Colin Gordon (New York: Pantheon, 1980), 78-108.
- 5 Huey, Robert N. *The Making of Shinkokinshu*. Harvard University Press, 2002, 20.
 - 6 久保田淳、『新古今歌人の研究』、東京大学出版会、1973年、471頁。
 - 7 Jamie Newhard, *Knowing the Amorous Man: a History of Scholarship on Tales of Ise* (Cambridge: Harvard University Press, 2013), 3-4.
 - 8 Robert N. Huey, "The Medievalization of Poetic Practice," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 50, no.2 (1990): 651-668.
 - 9 三村昌義、「謡曲と『万葉集』：世阿弥の受容の一端」、『藝文研究』第77巻、1999年、189頁。
 - 10 Keith Busby, *Codex and Context: Reading Old French Verse Narrative in Manuscript*, vol.1 (Amsterdam and New York: Rodopi, 2002), 58-64.
 - 11 John Dagenais, *The Ethics of Reading in Manuscript Culture: Glossing the "Libro de Buen Amor,"* (Princeton: Princeton University Press, 1994), 3-29.
 - 12 藤岡忠美（編）、藤原清輔「袋草紙」、『新日本古典文学大系』第29巻、岩波書店、1995年、35-36頁。
 - 13 藤岡忠美（編）、藤原清輔「袋草紙」、『新日本古典文学大系』第29巻、岩波書店、1995年、35頁。
 - 14 藤岡忠美（編）、藤原清輔「袋草紙」、『新日本古典文学大系』第29巻、岩波書店、1995年、36頁。
 - 15 佐佐木信綱（編）、「奥義抄」『日本歌学体系』第1巻、風間書房、295、298頁。
 - 16 竹下豊（編）、藤原俊成「万時」、『冷泉家時雨亭叢書』第39巻、朝日新聞社、1994年、194-201頁。
 - 17 渡部泰明、小林一彦、山本一（編）、藤原俊成「古来風体抄」、『歌論歌学集成』第7巻、三弥井書店、2006年、40頁。
 - 18 渡部泰明、小林一彦、山本一（編）、藤原俊成「古来風体抄」、『歌論歌学集成』第7巻、三弥井書店、2006年、47-48頁。
 - 19 渡部泰明、小林一彦、山本一（編）、藤原俊成「古来風体抄」、『歌論歌学集成』第7巻、三弥井書店、2006年、49頁。
 - 20 家郷隆文、「『古来風体抄』の『万葉集』歌」『「万葉集」とその伝統』、大久保正（編）、桜楓社、1980年、256-275頁。
 - 21 渡部泰明、小林一彦、山本一（編）、藤原俊成「古来風体抄」、『歌論歌学集成』第7巻、三弥井書店、2006年、87頁。

参考文献

- Carter, Steven D. "Seeking What the Master Sought: Masters, Disciples, and Poetic Enlightenment in Medieval Japan." In *The Distant Isle*, ed. Thomas Hare, Robert Borgen, and Sharalyn Orbaugh, pp.35-58. Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1996.
- Dagenais, John. *The Ethics of Reading in Manuscript Culture: Glossing the "Libro de Buen Amor."* Princeton: Princeton University Press, 1994.
- Foucault, Michel. "Two Lectures." In *Power/knowledge: Selected Interviews and Other Writings, 1972-1977*, ed. Colin Gordon, pp.78-108. Pantheon, 1980.
- 藤岡忠美（編）、藤原清輔「袋草紙」、『新日本古典文学大系』第29巻、岩波書店、1995年。
- 家郷隆文、「『古来風体抄』の『万葉集』歌」『「万葉集」とその伝統』、大久保正（編）、桜楓社、1980年、256-279頁。
- 埴保己一、太田敏郎（編）、藤原俊成「万葉集時代考」、『続群書類従』第16巻第2号、続群書類従完成会、1957年。

- 檜垣孝、「俊成の『万葉集』受容について」、『日本文芸論考』第7巻第3号、1977年、30-35頁。
- Huey, Robert N. *The Making of Shinkokinshu*. Harvard University Press, 2002.
- Huey, Robert N. “The Medievalization of Poetic Practice.” *HJAS* 50: 2 (December 1990), pp. 651-668.
- 久保田淳、『新古今歌人の研究』、東京大学出版会、1973年。
- 松野陽一、『藤原俊成の研究』、笠間書院、1973年。
- 三村昌義、「謡曲と『万葉集』：世阿弥の受容の一端」、『藝文研究』第77巻、1999年、188-204頁。
- Newhard, Jamie L. *Knowing the Amorous Man: a History of Scholarship on Tales of Ise*. Harvard University Press, 2013.
- 西村加代子、『平安後期歌学の研究』、和泉書院、1997年。
- 中西進、『『万葉集』形成の研究』、講談社、1995年。
- 中村文、『後白河院時代歌人伝の研究』、笠間書院、2005年。
- 佐佐木信綱（編）、「奥義抄」『日本歌学体系』第1巻、風間書房、270-418頁。
- 竹下豊（編）、藤原俊成「万時」、『冷泉家時雨亭叢書』第39巻、朝日新聞社、1994年、189-210頁。
- 谷山茂、『新古今集とその歌人』角川書店、1983年。
- 寺島修一、「御子左家相伝の『万葉集』の形態」、『武庫川国文』第65巻第3号、2005年、1-12頁。
- 渡部泰明、小林一彦、山本一（編）、藤原俊成「古来風体抄」、『歌論歌学集成』第7巻、三弥井書店、2006年。
- 山崎福之、「俊成本万葉集」試論——俊成自筆『古来風体抄』の万葉歌の位置、『美夫君志』第53巻第10号、1996年、5-25頁。

付言 当初のプログラムの題目から多少タイトルを変更した。

* 討論要旨

海野圭介氏は、不安定という概念について、テキストの内容が流動的だったということなのか、テキストの信頼性が乏しいものであったということなのか、何が不安定であったのか、と質問した。発表者は、不安定性については色々な要素が重なっており、和歌の有無の違いや『万葉集』についての情報が流動的であるために分かっていないことも多かったことを意味しているとし、但しその知識が流動的であったからこそ自説が正しいとも言えた、と回答した。海野氏は上記の質問をした理由として、大きく分けて見ると、『古今集』や勅撰集の注釈と比べ、『万葉集』に対してはどう成立したのか、本当に勅撰なのかという論点が主でテキストクリティックが進まなかった一方、『古今集』は証本が残っていることからテキストクリティックが進み、あるいは貫之自筆がどのようなものなのかが追究されるなど、書誌学的な方向へ進んでいくと述べた。つまり、何を突き詰めていくのかという論点に違いがあり、それが中世前期における『万葉集』の享受の一つの在り方だったのではないかと考えていると述べた。